

# 近世及び現代中国語における進行の「在V」について —中国語辺縁資料が繋ぐ明代白話と現代中国語の「在V」句型—

## The Progressive “在V” in Early-Modern and Present-day Chinese

伊原 大策  
IHARA Daisaku

### Abstract

The origin of the progressive “在V” form in present-day Chinese has not been fully explored in spite of the fact that it is frequently used in the standard Chinese. The present paper, using both traditional literary work and data from other languages, employs a new perspective on the origin and widespread use of the “在V” form and claims the following: (1) the progressive “在V” was already in use in the Ming Era, (2) it was found more frequently in translation data in the Qing Era, (3) the “在V” form in present-day Chinese originated from translation styles, and (4) the earliest examples of the “在V” form found in present-day Chinese novels were, in fact, not used by Chinese novelists, but by Japanese official translators in the Office of the Governor-General of Taiwan.

Key words : Progressive form “在V”, Fujian dialect, Taiwanese, Chinese bible, the Governor-General of Taiwan

キーワード : 進行形「在V」、福建語、台湾語、漢訳聖書、台湾総督府資料

### 1. まえがき

現代中国語の進行形「在V」は、標準語において頻用されるよく知られた句型でありながら、語法史上の由来については定かでない。また、「在V」が場所表現に繋がる形態を有するにもかかわらず、それがなぜ進行の機能を持つのかという点も不明である。そのため、早い時期から注目の対象となっており、少なからぬ論考が発表されている<sup>1</sup>。

それらに拠れば、この進行形「在V」は南方方言が特徴的に有する進行表現の影響下で民国初期に至ってようやく発生した新興語法であり、新文学運動の下で急速に普及し、標準語に取り入れられたものであるとされる。

しかしながら進行形としての「在V」は、信頼できる資料に拠れば紛れもなく明代にまで遡る

1 王力1944；香坂1952；黎・劉1957；蕭斧1957；伊原1982；張亞軍2002等。

ことができる<sup>2</sup>。そのため、この句型の起源を民国初期の南方方言にのみ求めることは不適当である。とはいえ、明代白話の「在V」と現代中国語の「在V」との間には大きな時代差が存在し、両者にどのような継承性があるかについては、なお明らかでない<sup>3</sup>。

最近では電子コーパスを利用した研究が行われるようになった結果、考察のための新たな資料が大量に提供されるようになった。しかしそれによって旧白話の「在V」と現代中国語の「在V」との間の阻隔が埋まるようになったわけではない。電子コーパスは大規模なものであっても、文学史上において標準的な作品を収集の主対象としているため、方言由来と想定される「在V」の調査資料としては不十分だからである。

小論は、電子コーパスの対象になっていない中国語辺縁資料をも用い、明・清代から現代に至る過程において、進行を表す「在V」がどのような姿を呈しつつ継承されたかを追跡しようとするものである。

## II. 「在V」に関する先行研究

先ず従来の研究をあらためて振り返る。

進行を表わす「在V」について専論で考察を行なっている初期論考のうち、最も注目できるのは香坂のものであろう。

香坂(1952)は、現代の南方方言において、場所を表わす句型から場所詞を脱落させた結果として成立した語法が、現代中国語の「在V」であると考え、呉語を始めとする南方系方言を用い、場所表現とアスペクト表現を結びつける見解は、呂(1940)に既に見られるものであるが、とりわけ南方方言において場所を示す表現が、進行のアスペクトを表わす句型と類似した形態を持つことをその根拠としている。

この見解に従えば、「在那里V」の場所詞相当語(“那里”またはその一部)の脱落したものが五・四期の新文学運動の中で普及した結果、「在V」が成立したということになる。

中国語において場所表現と進行表現がしばしば重なる事実は、早くからネイティブスピーカーに自覚されており、黎・劉は“‘在’表動作正在進行，就是‘在那裡’之省。有些方言不能省”と述べる(黎・劉 1957: 336)。同様に、呂も“‘在那裡、在這裡’等的處所意義有時很不明顯，主要表示‘正在進行’”と考える(呂 1980: 574)。つまり、中国語においては「あそこで～する」の「あそこ」が特に何も指示しない時、「～している」の意味を示すというのである。

場所表現が進行のアスペクト表現に繋がる理由については、少なからぬ言語で場所表現と時間表現が重なる現象の認められることから、世界の言語に広く存在する傾向の一つとして済まされることがある。しかしそれでは、清末・民国初期に「在V」が普及を始める際、なぜ南方方言でその優勢が明瞭に示されたのかを説明できない。

2 万曆丁酉(1597年)羅懋登の序を持つ《三宝太監西洋記》には「在V」の用例が大量に使用される。この事実を最初に指摘し考察を加えたのは、伊原(1991)である。

3 比較的新しい論考(高増霞2005;石毓智2006;劉・曹2010;王錦慧 2015等)でも、この点に焦点を当てて考察が行われているわけではない。

現代中国語についての観察に基づけば、介詞による状語構造は動作の持続性と関連を持つ傾向が顕著である。すなわち「在+P+V」句型には動作の持続可能な動詞しか使えず、瞬間で動作が終了する動詞は嫌われる。例えば“在那里做”は可能だが“在那里坐”は安定性を欠く。“坐”のように、瞬間で動作が終了する動詞をこの句型で用いようとすると、例えば動詞の後ろに“着”を加え、持続性を明示しなければならない。この現象は、“在做+O”が可能であっても“在坐+P”が不可である事実と呼応する（伊原 1982：1-2）。

状語構造のこうした特徴は現代中国語の諸方言に広く認められるものの、持続性と瞬間性の境界が曖昧な動詞“住”に関しては南北で許容度の異なる状況が知られている。すなわち“我在北京住”について、北方では許容度が高く南方では低い（伊原 1982：2-3）<sup>4</sup>。この事実は、南方方言の「在+P+V」が、北方方言と比較して、より持続性を有することを示唆するものである。

したがって、進行形「在V」がその発生及び普及の過程において、南方方言との関係が顕著に認められるのは、南方方言が持つこうした特性に基づくものであると解することができる。

以下では、進行を示す機能が場所表現と密接な関わりを持つこと、及びそれが南方方言に広く存在する特徴であることを踏まえながら、現代中国語の「在V」と旧白話の「在V」との間に存在する変遷過程の空白を埋めることを試みる。

### III. 明代の「在V」

多くの先行研究が示すように、形態上において“在V”の要素を含む進行句型は明代からその姿を明瞭に現し始める。とは言え、旧白話に多く認められるのは「正在V」であり、「在V」は極めて少ない。この2種の句型の用法には明瞭な違いが存在し、前者は従句用法に偏り、後者は主句用法に偏る（伊原 1982：4-6）。また、それらが使用される環境にも明らかな差異があり、「正在V」は明代から現代まで多くの白話作品に一貫して用いられる一方で、「在V」は明清において極めて一部の作品に限って用いられ（伊原 1991：16-17）、それが普及の兆しを示すのは民国時代まで待たねばならない。

そのため小論は、「正在V」と「在V」が進行の機能を獲得するに至った過程に共通するものがあるとは言え、伊原（1982）が示すように、語法史的に見た場合、これらの句型は由来が異なるものと見なす立場を取る。同様に、「正」と類義を有する副詞を伴う「方在V」を「正在V」の類型と見なし、持続性を有する副詞を伴う「還在V」を「正在V」から派生し「在V」に接近しつつある過渡的形態として扱う。

こうした観点に基づいて見た場合、伊原（1991）が指摘する《三宝太監西洋記》は注目すべき作品である。この作品には全篇に渡って大量の「在V」を見出すことができるからである。ここにあらためて「在V」及び「還在V」の例を示すと以下のようである<sup>5</sup>。なお用法に基づき、「也在V」「都在V」「只在V」をも「還在V」の類例と見なす。

4 伊原1982：2-3の他、戦前の華語教科書でも触れられている。

5 《三宝太監西洋記》を今に伝える信頼すべきテキストとして11行本と12行本の二種類が存在するが、これら両本の間で「在V」の用法に関してほとんど異同はない。小論の引用にあたっては12行本を採用した。

1. 原來天師出神去了，長老站在丹墀之中，眼若垂簾，半醒半睡，也在出神。(《三宝太監西洋記》12) (なんと天師は魂を体から出して遊離させ、長老も宮殿の廊下で立ち止まって臉を下ろして目を閉じ、夢うつつのままであった)
2. 徒孫雲谷說道：“師公還在打坐，眼皮不會撐開。”(《三宝太監西洋記》30) (孫弟子の雲谷は「お師匠様はまだ座禪を組んでいらっしゃるところでして、臉が開いておりません」)
3. 小的夜來也聽著那番官在念哩，也不見甚麼苦苦的傷公道。(《三宝太監西洋記》54) (「私はあの蛮族の役人が夜に〔この本〕を読んでいるのを聞きましたが、別に物事の道理にひどく背くようなことはありませんでした」)
4. 一刮刮倒了地獄門，直看見閻王菩薩在勸善。(《三宝太監西洋記》56) (風がひとたび吹くや、地獄門を吹き倒すので、閻魔菩薩が善行を勧めているのが見える)
5. 這個狼牙釘，又在惹火燒身哩。(《三宝太監西洋記》62) (「この狼牙釘〔狼牙の発した槍〕は、また火を生じ〔西海蛟の〕体を焼いている」)
6. 卻說三太子聽見南船上人人都在做夢，個個都在打呼，心上大喜，說道。(《三宝太監西洋記》64) (さて三太子は南船の人たちがみんな夢を見ており、みんな鼾をかいているのを知って、心で大いに喜んで言った)
7. 行軍之際，見喜不喜，見怪不怪。你只在說些邪話哩。(《三宝太監西洋記》66) (「軍を進める時は、楽しいことを見ても楽しくないし、異様なことを見ても異様だとは感じないものです。だからあなたは縁起の悪い話をしているだけなのです。」)
8. 紅蓮坐在蒲團上，哼也哼，還在哭。哭了一會，把隻手揉起肚子來。(《三宝太監西洋記》92) (紅蓮は禪の座布団の上に座って、ワンワンとまだ泣いている。しばらく泣くと、片方の手でお腹を押さえた)

このように、「在V」が単独で使用される例の他、「也」や「還」等の副詞を前置させたり、さらには「哩」を後置させたりする例が存在し、多様な「在V」の姿を認めることができる。明代白話の「哩」は、語史的な観点から見ると、現代中国語の進行を示す「呢」に相当する。そのため、上例の「在V哩」は現代中国語の進行形「在V呢」に一致すると言える。したがって、この明代白話作品の進行表現は、現代中国語の進行表現に極めて近い。

ところが、大量の「在V」を含む旧白話作品は、現在知られている限りでは《三宝太監西洋記》以外に存在しない。それ以外の白話作品では、しばしば一例すら見出すことが難しい。それだけに、《三宝太監西洋記》の「在V」が正しく進行を示す機能を持つものかどうかについては、確認する必要がある。その際、文脈に頼らざるを得ないが、一部では進行に関わる表現が対になって採用されている例がある。以下ではそうした例を観察することにより、恣意的な解釈を排除する。

9. 道猶未了，崔判官已自到了廳上，問說道：“側廳兒是那個在講話哩？”王明慌了，悄

悄的說道：“你出去，我且站在這裡。”劉氏道：“他豈可不看見？”王明道：“我有根隱身草，不妨得。”劉氏道：“隱身草只瞞得人，怎瞞得神。‘暗室虧心，神目如電。’你站著轉不好，你不如同我出來，只我先行一步就是。”好個劉氏，行止疾徐，曲中乎禮。行到廳上，說道：“側廳兒是我在那裡講話。”（《三宝太監西洋記》87）（言い終わらないうちに崔判官はもう広間に来て「控えの間では誰が話をしていたのだ」と聞いた。王明は慌てて小さな声で〔崔判官の妻である劉氏に〕「あなたは広間へ出て行きなさい。私はしばらくここにいるから」と言うと、劉奥さんは「あの人がどうして〔あなたを〕見つけないことがあるのでしょうか」と答える。王明は「私は魔法の隱身草を持っているから平気さ」と返事する。劉奥さんは「隱身草は人を騙すことができるだけで、鬼神を騙すことはできないわ。『こっそり悪いことをしても鬼神はお見通し』って言うでしょ。あなたは立ったまま帰るのはよくないわ。私の後について来て。私が一步先に行くから」と答えた。大胆な劉奥さんは、立ち居振る舞いがすべて礼に適っている。そして広間へ行くと〔崔判官に向かって〕「控えの間では私が話をしていたのです」と言った）

ここでは“側廳兒是那個在講話哩？”という質問に対する返事として“側廳兒是我在那裡講話。”が用いられている。“側廳兒是我在那裡講話”では、先に“側廳兒”という場所が明示されているにもかかわらずその直後においてさらに“在那裡”によって場所詞が重ねられている。そのためこの“在那裡”は場所を示す機能のみを担っているわけではないことが知られる。これは明代白話に見られる典型的な進行表現「在那裡V」に他ならない。したがってここでは、「在V」=「在那里V」という関係が成立している事実を確認できる。つまりこの「在V」は場所表現と密接な関連を持つ句型であり、すなわち現代中国語における進行の「在V」と同質のものであると言える。

また、「在V」が「V着」に相当する表現として使われている例も見い出すことができる。

10. 把個小娘子也解開上身衣服，肚皮兒靠著肚皮，挨了一會。不知怎麼樣兒，那小娘子的下身小衣服都是散的。那小娘子肚皮兒一邊在挨，一雙小腳一邊在搗，左搗右搗，把和尚的小衣服也搗吊了。吳紅蓮原是有心算無心，借著挨肚皮為名，一向挨著和尚不使之處。（《三宝太監西洋記》92）（〔和尚は病気を治してやるために〕その娘を抱いて上半身の服をはだけさせ、自分のお腹の皮を娘のお腹の皮にしばらく押し当てていた。するとどうしたわけか、その娘の下半身の下着がすっかり外れてしまった。娘はお腹の皮を押し当てながら、足でぐいぐいと動かし、右へ左へと動かしているうちに、その和尚の下着も外れてしまった。吳紅蓮は悪巧みがあるくせにないふりをして、〔病気を治すために〕お腹の皮を押し当てるということを口実に、そのまま和尚の困った部分に体を押し当てていた）

ここでは、用例の前半において、“一邊在挨”と表現されている行為が、末尾部分では持続の“着”を伴う“一向挨着”と表現されている点が注目できる。すなわちここには“在挨”=“挨着”という関係が成立している。したがって、この例の「在V」も確かに進行を示す機能を有していると見ることができる。

「在V」と「V着」が相応の関係を持つことを示す例は、他作品からも見出すことができる。例えば《古今小説》に見られる次の例である<sup>6</sup>。

11. 自後過來得數日，劉太尉因操軍回衙，打從桑維翰丞相府前過。是日，桑維翰與夫人在看街里，觀著往來軍民。劉知遠頭踏，約有三百餘人，真是威嚴可畏。（《古今小説》15）（それから数日たってからのこと、劉太尉は軍事教練を終えて桑維翰丞相の家の前を通った。この日は桑維翰は夫人と通りを眺め、通行人を見ていた。劉知遠の儀仗兵は約三百人余りで、まことに威嚴があった）

ここでも“在看”=“観着”という関係を読み取ることができる。そのため、この「在V」も進行を示すと考えてよい。

このように、用例数は多くないものの、《三宝太監西洋記》以外の明代白話作品にも進行の「在V」を認めることができる。この傾向は、この後も続く。《醒世恒言》からは、次の例を認めることができる<sup>7</sup>。

12. 我若嫁得這般個丈夫，便心滿意足了。只是怎好在爹媽面前啟齒？除非他家來相求纔好。但我便在思想，吳衙內如何曉得？（《醒世恒言》28）（もし私がこのような男に嫁ぐことができたなら、十分に満足できるわ。ただ両親の前でどのように切り出したらよいものか。あの人が申し込んで来てくれるならいいのに。だけどいくら私が考えていても、[相手の男の] 吳さんは[私の気持ちを] わかってくれるはずがないわ）

したがって、作品ごとの使用頻度に著しい差があるとはいえ、進行の「在V」を持つ明代白話作品は、《三宝太監西洋記》のみではないことが知られる。《三宝太監西洋記》は「在V」の用例に関して突出した作品であるが、これ以外の明代白話にも「在V」の存在することが確認できる。

6 《古今小説》は成立背景の不明な話柄が明末に再編集を受けて成立した作品である。そのためそこに含まれる語彙・語法が明末の言語を反映するとは限らない。香坂1968は《古今小説》15について、早期白話の残存が著しいものと推定する。同様に佐藤1993も、先行する話本の存する可能性が最も高いものと推定する。つまり先行研究に拠れば、引用した《古今小説》15は比較的古い言語を反映している部分を少なからず含むと言える。

7 佐藤1990に拠れば、ここで示した《醒世恒言》28は明人の作品であると推定される。つまりここに引用した作品は早期白話作品ではなく、比較的遅い時代の作品であると考えられる。

#### IV. 清代の「在V」

清代においても白話小説から「在V」の用例を見出すのは極めて難しい。しかしながら、非伝統的白話文体による作品にまで調査対象を拡大すれば、進行の「在V」を見出すのは困難ではない。非伝統的白話文体作品とは、例えば漢訳聖書のことである。

漢訳聖書は、教義の布教上の理由に基づく地理的要因により、初期例はしばしば南方方言によって記述される。それのうち閩南語系の漢訳聖書には幾つもの「在V」句型を認めることができる<sup>8</sup>。例えば、次の如き例である。

13. 伊在喊以利亞也。(1892年、閩南語系《馬可福音》15-35) (彼がイリアを呼んでいる)

ここでは動詞「喊」の直前に「在」が使用されている。この「在」は閩南語において“teh” (教会ローマ字表記による) と読まれるものの漢字表記であることに疑いはなく、進行を示す機能を持つものであると理解できる。

“teh” について、C.Douglasの閩南語辞典*Chinese-English Dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy* (《廈英辞典》1873年) に拠れば、次のように説明される。

14. teh prefix to verbs, expressing the continuance or present doing of the actions (1873年  
*Chinese-English Dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy*. p. 484)

閩南語において「在」が動詞に前置されると進行のアスペクトを表す機能を有することが、ここでは明確に認識されている。こうした「在V」の用法は、他篇の清末閩南語聖書にも見出すことができる。

15. 伊在談論加利利人。(1874年 閩南語系《福音四書合串》21) (彼はガリリ人のことを話している)  
16. 因為眾人在等伊來。(1874年 閩南語系《福音四書合串》24) (みんな彼が来るのを待っているからである)  
17. 二個媳婦另外開聲在哭。(1875年 閩南語系《路得氏記》1) (二人の女性は別に声を上げて泣いている)

一方、この頃の北方官話による聖書の翻訳はどのように表現されているかについて見ると、例

8 調査の対象にした漢訳聖書は以下の諸本である。閩南語系《福音四書合串》福州美華書局1874年。閩南語系《路得氏記》上海美華書館1875年。閩南語系《使徒行伝》上海美華書館1877年。閩南語系《馬可福音》福州美華書局1892年。さらに比較の対象として以下の諸本を使用した。北方官話系《約翰福音書》(出版所記載なし) 1864年。北方官話系《馬可福音書》上海美華書館1865年。北方官話系《使徒行伝》上海美華書館1865年。北方官話系《路加福音書》上海美華書館1865年。北方官話系《馬太福音書》上海美華書館1865年。

13の「在V」に相当する部分は以下のようにになっている。

18. 他叫以利亞呢。(1865年 北方官話系《馬可福音》15-35) (彼がイリアを呼んでいる)

この例では、北方官話系聖書において「在V」ではなく「V～呢」が採用されている。これは民国初期の北方方言の進行表現の特徴に等しい。

また北方官話系聖書では、進行を示すために「在那里V」も採用される。

19. 讀書人和長老都在那里聚會。(1865年 北方官話系《馬太福音》26-57) (学者と長老たちが(そこに)集まっている)

「在那里V」によって進行が示されるのは、明代白話に広く認められる表現であり、この例は旧白話の伝統をそのまま採用したものであると同時に、その伝統を踏襲した民国初期の北方系作品に見られる進行句型とも一致するものである。

このように清代の閩南語系聖書と北方官話系聖書の間には、民国初期に認められる進行形における南北方言の差が、已に明瞭に現れている。

さて、王力が新興語法としての「在V」の起源を呉語に求めて以来(王力1944:204)、進行形の由来を説く際、決まって呉語が引き合いに出され、多くの研究者がその見解に追隨してきた<sup>9</sup>。しかし呉語の口語文献から「在V」句型の使用例が大量に見い出された事実が存在しないだけでなく、呉語の進行句型も、その構成要素や語順において「在V」と直接的には繋がらない。例えば、知られている下江官話系方言の進行形は、“在”とVとの間にしばしば場所詞相当句が挿入され、その形態が「在V」と必ずしも一致するわけではない<sup>10</sup>。したがって現代中国語の進行形の由来を呉語に求めようとする見解は、南方方言一般における場所表現と進行形との関係の深さを示唆する以上の価値を持ち得ない。

一方、閩南語の“teh”は、それに“在”という漢字表記を与えさえすれば、そのままの形で現代中国語の「在V」が成立する。音韻の観点から見た場合、閩南語の“teh”の本字は不明であるとされる(王育徳1969:1)。しかし、閩南語の“teh”の意味上及び語法上の特徴に基づきそれを漢字で表記しようとするれば、自ずと「在」という字が選択される。

閩南語において「在V」と表記して進行を表現する例は当時の他の資料でも広く確認できる。例えば宣教師によってアモイで編纂された閩南語教本がそれである。J. Macgowanの*A Manual of the Amoy Colloquial* (《英華口才集》1871年)<sup>11</sup>には以下のような説明がなされている。

9 例えば香坂1952:84や呂1955:5及び植田1982:17等。

10 香坂1952の折り込みの対照表を見ても、そこに示される各地の呉語系方言の進行形を構成する要素が「在V」と逐語的に一致するわけではない。

11 村上に拠れば、*A Manual of the Amoy Colloquial*の初版は1871年刊である(村上1965:66)。但しFirst Editionは稀観書であるため入手できなかったため、小論はやむを得ずThird Editionを使用した。



20. 尚在講話 lau-ku teh kong-oe They are still talking. (1871年 *A Manual of the Amoy Colloquial* p.11)

ここでは、“teh”という音に「在」という表記が与えられ、英語の進行形に相当するものとして示されている。同書には実用会話文として、さらにいくつかの「在V」が載せられている。

21. 有人執燈假作天未光尚久在討。(提灯を持ってまだ夜が明けないことを装って、(借金を)取り立てている人もいる)(1871年 *A Manual of the Amoy Colloquial* p.155)  
 22. 打算有兩等鬼在作弄。(体調が悪くなったのは)二体の靈が悪さをしているからだと考える)(1871年 *A Manual of the Amoy Colloquial* p.174)

このように「在V」と閩南語との縁は浅くない。しかしながら、「在V」の使用例は、閩南語系資料のみに限られるわけではない。例えばBAN-ZAI-SAU<sup>12</sup> (François Turretini《晩採草》1874年)にも「在V」の用例を認めることができる<sup>13</sup>。この書は西欧人向けに編纂された中国語教本であり、中国語の運用上の特徴に対して極めて鋭い観察力を示す。ここで扱われている中国語は一部で南方系中国語の子音の特徴を有している他、入声韻をも残している。そのため、南方系方言であることを思わせるが、閩南語の特徴を認めることができるわけではない。一方、介詞の“給”の用法には時として北方方言的特徴<sup>14</sup>が存在し、以下に示すような文法説明も行われている。そのため、この書で採用されている中国語は北方官話を視野に入れつつ、それ以外の要素をも含む南方系方言であると考えられる。

23. 嗎ma3 is very commonly employed in Pekin instead of 麼mo3. (1874年 BAN-ZAI-SAU vol. 2)

さらにBAN-ZAI-SAUでは、中国語におけるpresent tenseについて、次のように説明される。

24. As previously remarked (vol. 1. Obs. 67) the distinction made between the different forms of the present tense in English does not exist in Chinese. *I love, I am loving, or I do love* are all rendered by 我愛wo3 ngai4. The active form, however, *I am loving*, i.e., at this very moment, may also be rendered by 我在愛wo3 tsai4 ngai4, lit, *I am in love*. (1874年 BAN-ZAI-SAU vol. 3)

12 編者または出版者としてFrançois Turretini (簡所によってはFrancis Turretiniとも表記される)の名前が記されている。この書には全書を通しての頁番号はないので、引用にあたって巻数を記した。

13 この興味深い用例が横浜開港資料館所蔵Blum CollectionのBAN-ZAI-SAUに存在するのを見出し、それを報告したのは大塚1991である。ここでは氏の報告を利用して頂いた。特此敬表衷心的感謝！なお大塚1991は『晩採草』(1873)」とするが、序文の日付は1874年である。

14 ここで言う北方方言的特徴については、伊原1984:300及び伊原1986:7-11に詳しい。

これに続いてさらに以下の例文が示される。

25. I love            我爱  
       I do love      ㄣ  
                       ㄣ 我爱, 我在爱  
       I am loving ㄣ                            (1874年 BAN-ZAI-SAU vol. 3)

つまりBAN-ZAI-SAUの説明によれば、中国語には現在形と現在進行形の区別はないのだが、現在進行形を強いて表現しようとするれば「在V」が用いられるということである。

BAN-ZAI-SAUが成立した19世紀後半は、民国期の作家が「在V」を盛んに試み始めるより50年も早い。そのため、ここで使用されている「在V」は、BAN-ZAI-SAUの編者が新文学運動の萌芽的状况を見聞して記述したものではあり得ない。新文学運動において「在V」が用いられる遙か以前から、口語において「在V」が存在し、進行を表現する句型として知られていたことは疑いない。

BAN-ZAI-SAUのこうした記述は、清代後半において、閩南語以外でも進行を示すために「在V」が採用されたことを示している。したがって、進行の「在V」は、清代の白話文学作品から容易に探し出すことができないものの、その表面に現れがたい形で明代以来の姿を清代に至っても保持し続けていたと考えられる。

## V. 二十世紀初頭の「在V」

こうして継承されてきた「在V」は、20世紀初頭の新文学運動の実践の中で、姿を明瞭に現すようになる。調査の限りでは、民国期における最も早い「在V」の複数使用例は、新文学運動の最初期に現れる。王力が朱自清の説として郭沫若起源説（「似乎郭沫若始用此式」）を紹介するが（王力1944：204）、以下に示す用例は、郭沫若の本格的な文学活動開始時期<sup>15</sup>よりも早い。

26. 啊呀，你聽。他在敲門呢。（1916年 陳嘏訳〈弗羅連斯〉《新青年》2-1）（あ、ほら。彼がドアを叩いている）  
 27. 噢！呆子，基爾米里，你在哭嗎？（1917年 陳嘏訳〈基爾米里〉《新青年》3-5）（おや、馬鹿だね、ジェルミニイ、おまえは泣いているのかい）

この作品を書いた陳嘏という人物は陳独秀の兄の息子であり、1890年頃に生まれた安徽省人である。また陳独秀と同様に日本への留学経験があることも知られている（葉永勝2010）。

現在に残る資料に拠る限りでは<sup>16</sup>、陳嘏の文学活動は翻訳に偏っており、1910年代から1920年

15 龔・方1982：1-94を参照した。

16 樽本1997を参照した。

代にかけてオスカーワイルド、ツルゲーネフ、モーパッサン及びイブセン等の作品を中国語に訳している。清末の安徽省で育った少年翻訳家が短期間に英語・ロシア語・フランス語等の複数の言語を駆使して原典からの翻訳を行うことは不可能に近く、またこれらの作品の作家は明治・大正期に日本で好まれた作家であるので、陳榘の翻訳は日本語訳された西欧文学作品に基づいて行われたものであると推測される<sup>17</sup>。

これらの翻訳作品が書かれた時期は、新文学運動が提唱され始めた時期にちょうど一致しており、この直後に胡適の《文学改良芻義》(1917年1月《新青年》2-5)や傅斯年の《文章合一草議》(1918年2月《新青年》4-2)が発表されている。そのため、陳榘は陳独秀のネットワークを通じて接触した《新青年》において作品を発表することで、新文学運動にふさわしい口語文体の実験を試みていると考えられる。

《新青年》は新文学運動の理論と実践を唱導する中で、翻訳活動をも重視した。原稿募集にあたっては、「投稿簡章」において「來稿譯自東西文者，請將原文一并寄下」と述べ、訳文には外国語の原文を添えて投稿するよう求めた。《新青年》には対訳形式の作品紹介がしばしば採用されていることから窺えるように、掲載される翻訳作品には、原文に一致する正確な表現が求められたのである。これは、当時の一部作家に見られた翻案や意識を斥けることを意味している<sup>18</sup>。したがって、陳榘の翻訳作品に見られる「在V」は、外国語の進行形を中国語に置き換える過程の中で用いられ始めたと考えてよい。

この後まもなく多くの南方系作家によって「在V」が盛んに採用されるようになり、1930年代文学の流行を通じて、やがてそれが北方にまで普及し、現代標準語の「在V」が成立する<sup>19</sup>。

そこで、陳榘に続く時期に「在V」を多用した作家の経歴を見ると、その例でも外国語との接触経験のあることが知られる。以下は1920年代初頭に「在V」を多用し始めた魯迅(1902年日本留学、浙江省人)作品の例である。

28. 月亮地下，你聽，啦啦的響了，猿在咬瓜。你便捏了胡叉，輕輕地走去…。(1921年魯迅《故郷》)(月明かりのもとで、ほらサラサラという音が聞こえたら、猿が西瓜を食べているところさ。そしたら刺す叉を手に持ってそうっと近づいて行って…)
29. 他還認得路，於是有些詫異了：怎麼不向著法場走呢？他不知道這是在遊街，在示眾。(1921年 魯迅《阿Q正伝》9)(彼はそれでも道がわかったので少しばかり不思議に思った。どうして刑場に向かって進まないのだろうか。彼には、罪人の引き回しをしているのであり、見せしめを行っているのだということが、わからなかった)
30. 你在做甚麼？怎麼爹叫也不聽見？(1924年 魯迅《肥皂》)(「おまえは何をしているんだい。お父さんが呼んでもどうして聞こえないの」)

17 陳榘の中国語訳作品には、日本語の影響を受けたと見られる訳語が散見される。例えば『傀儡家庭』における「栗鼠」や「独身」等。これらは民国初期の標準的な中国語と言うより、明治・大正期の日本語に一致する。この事実も上記推測を支持する。

18 王彬は、『新青年』のこうした編集方針・形式について、清末翻訳にしばしば見られた恣意的改竄を防ぐため、編集部が意図的に採用したものであると見なしている(王彬2015: 108)。

19 民国以降の「在V」の普及については伊原に詳しい(伊原1982: 8-10)。

これまで「在V」生成の要件として、しばしば南方方言の影響のみが指摘されてきた。しかしながら、民国最初期の例には、作家の外国語学習経験という共通要素も存在する。この点は、清代において中国語が欧米系の言語と接触する環境の中で「在V」が使用された事実と符合する。そのため、「在V」の成立に影響を持ったのが何語であったかは暫時問わないまでも、進行形を明確に有する外国語との接触の中で「在V」の使用が促されたという事実を認めることができる。清代の「在V」は閩南語系方言が西欧語と接触する環境の中で使用され、民国最初期の「在V」は下江官話系方言を母語に持つ作家が日本語と接触する環境の中で使用された。したがって、「在V」の普及には、南方方言の他に、外国語との接触が要素の一つになっているということになる。

## VI. 二十世紀初頭の台湾語資料における「在V」

清末において中国語が外国語と恒常的に接触する機会を有するのは、植民地においてである。とりわけ、宗主国が支配者側の言語による近代教育制度を強力に実施した植民地では、両言語の接触がより濃密なものとなる。そうした条件を備えた植民地は、言うまでもなく台湾である。

台湾においては、中国本土の新文学運動とは異なった環境の中であるとは言え、南方方言が外国語と直接に接触する環境が成立し、そこで大量の中国語資料が作成された。すなわち台湾総督府において日本人通訳官（または総督府囑託の身分）によって記された台湾語文献であり、そこには早い時期から「在V」が多用された事実を確認できる。

例えば、日本人によって記された台湾語会話教本には、「在」についての文法説明として次のようにある。

31. 在寫 寫イテ居マス

在要寫 寫コオトシテ居マス

(解説)「在」は動作の現在を示し「在要」は動作若しくは形容の將然を示す。即ち一は「……シテ居ル」の語意に當り、一は「……ショオトシテ居ル」の語意に當る。(1902年 杉房之助《日台会話大全》p.79)

しかしながら、これは日本人の台湾語研究の成果としての見識ではない。日本が台湾統治を開始した際（始政式は1895年6月17日）には台湾語（閩南語）を解する日本人が存在しなかった<sup>20</sup>。そのため、総督府は台湾語（閩南語）人材の養成を急ぎ、閩南語研究資料の収集に努めた。その資料の有力なものの一つが前述の*A Manual of the Amoy Colloquial*であった<sup>21</sup>。この書は大部の著作

20 当時の日本人による台湾語学習の状況は、次の記録から知ることができる。「我征台軍遼東の野より本島に転戦し来りし部隊中には若干の北京語に通ずるもの包含せられたり…当時爾余の者にして本島語を解する者皆無なり」(台湾總督府警務局 1934 : 912)。

21 《台湾總督府公文類纂》第17冊1号、第17冊10号、第17冊26号には、総督府の学務部や殖産部が始政式直後にこの資料を取り寄せた記録がある。

としては当時唯一の閩南語教本であったため、初期台湾語資料のうち教学的体系性を重んじた教本はしばしばその影響を強く受けることとなった<sup>22</sup>。したがって、日本人の手になる《日台会話大全》が示す「在V」に関する見識は、前述の宣教師J. Macgowanの著作から学んだものであり、清代閩南語系聖書に示された「在V」を台湾という植民地において新たに継承したものであったと見ることができる。

こうして「在V」は台湾語教本で広く採用されるようになる。次の例は官製の台湾語教本が示す戸口調査用会話例である<sup>23</sup>。

32. 我在做生意。(1905年 臨時台湾戸口調査部《戸口調査用語》p.11) (私は商売をしています)
33. 您的父母誰人在奉侍。(1905年 臨時台湾戸口調査部《戸口調査用語》p.46) (あなたの両親は、誰が世話をしていますか)
34. 是在開茶行抑是在開茶店。(1905年 臨時台湾戸口調査部《戸口調査用語》p.177) (お茶の卸売りをしていますか、それとも小売をしていますか)

これらの台湾語は日本人によって書かれたものではあるが、ここに記されている台湾語は当時の現地の言語を正しく反映したものである。台湾人自身による漢字表記資料が少ないのは、当時の台湾人は台湾語（口語）を話せてもそれを書写する能力がないか<sup>24</sup>、その機会に恵まれなかったからである。そのため現地の人材が育つにつれて、台湾人の手になるものが現れる。以下に示すのは、日本統治最初期から総督府のもとで育てられた柯秋潔<sup>25</sup>の手になる台湾語教本の例である。

35. 彼個查某人，此候在買甚麼貨。(1915年 柯秋潔《台湾語教本》p.38) (あの婦人は今何を買っていますか)
36. 彼個查某囡仔怎樣在吼。(1915年 柯秋潔《台湾語教本》p.74) (あの女の子はなぜ泣いていますか)
37. 親像伊的欸，每日無創甚麼貨，怠々恹恹在逗逗… (1915年 柯秋潔《台湾語教本》p.80) (彼のように毎日何もしないでだらしなく遊んでいると…)

当時の台湾では通訳兼掌制度が設けられ、判任文官や警察官に台湾語の学習が奨励された。その結果、とりわけ官製の台湾語教本に採用された台湾語は、対象が統治現場の官吏や巡査に限る

22 伊原2013：71-72及び98に詳しい。また台湾語教本の著者については伊原2015に詳しい。

23 台湾語文献の原文には訳文の付いているものもあるが意識になっている場合が多いので、以下の台湾語例文では、進行形であることを明示するため、筆者による直訳を示した。

24 台湾人によって口語系文体（中国白話文、台湾語文）による表記が試みられるようになるのは、1920・1930年代になってからである。陳（2012：29, 100, 134）に詳しい。

25 柯秋潔は始政式直後に総督府において学務部候補生として採用され、以後大いに能力を發揮し、日本統治に協力した（《台湾総督府公文類纂》第49冊55号；第49冊90号；第44冊95号等）。

とは言え、台湾島内において語彙や文法及び表記の普及の点で大きな影響力を持つに至った。

こうして漢字による台湾語表記が盛んに行われるようになるにつれ、日本人の手になる台湾語小説も試みられるようになった。その結果、そこでも「在V」が多用される。以下の例は、総督府において通訳官としては最高位の高等官四等にまで上り詰めた小野西洲の台湾語小説<sup>26</sup>に見られるものである。

38. 大江的水，無分早暗長長在流。(1914年 小野西洲〈土語小説 恋の羅福星〉p.38) (大河の水は昼夜の別なく滔々と流れている)
39. 昨昏在淡江船裡，聽見彼個查婆在講。(1914年 小野西洲〈土語小説 恋の羅福星〉p.42) (夕べ淡江の船の中であの女が話しているのを聞いた)
40. 阮同心的，各的擺不驚死，看性命無要緊，熱心在辦事。(1914年 小野西洲〈土語小説 恋の羅福星〉p.51) (我々の同志はそれぞれ死を恐れず自分の命を省みず、熱心に活動している)

日本人によって広められた「在V」の表記は、この後も総督府や警察関係の機関誌・教本・辞書等の中で広く使用され続ける。歴史的に見れば、これらの「在V」の使用は、中国本土における「在V」の普及より20年以上早くに始まり、且つ使用頻度も著しく高い。台湾語資料に見られる数多くの「在V」は、場所表現に由来する進行形を有する中国南方方言と、もともと明確な進行形を有する外国語とが接触する環境において、中国語に「在V」の受容が促され、それが急速に普及する過程を反映している。

## VII. 結語

現代中国語に見られる「在V」句型について、以上に示した変遷過程を振り返れば、明代白話小説(《三宝太監西洋記》)に「在V」が早くも出現し、それが文学言語の表面に現れ難いながらも一部の白話作品(《古今小説》や《醒世恒言》)に保持されて明末に至り、さらに清代になって閩南語系資料(閩南語訳聖書及び閩南語の辞書・教科書)や西洋人による中国語教本(BAN-ZAI-SIU)に継承されつつ、民国の新文学運動(陳毅の翻訳作品や魯迅の作品等)を経て、現代の口語文体に採用されたとすることができる。

「在V」の初期例を大量に含む《三宝太監西洋記》の方言性については不明であるものの、それ以外の例はいずれも南方系資料に偏る。したがって、「在V」は、先行研究において已に想定されていたように、その発生と継承過程において南方系方言が大きな役割を果たしたと認めてよい。

しかしながら、清代において実際に「在V」が多用された例が、外国人によって編された閩南

26 台湾語通信研究會1914《語苑》7-3〈土語小説 恋の羅福星〉。この作品の成立に関しては潘為欣(2012)に詳しい。また小野西洲については、楊承淑(2014)の労作がある。

語系翻訳資料に偏るという事実は新たに注目されなければならない。この事実は、「在V」の民国期の最初期例が下江官話系方言地区出身者である留日作家による翻訳作品の中に確認できるといふ事実に符合する。そのため、「在V」の継承には南方系方言からの影響という要素の他に、外国語との接触による影響という要素の存在を認めることができる。これは、中国語が異言語と接触する際に、外国語に比して進行の aspekto を明示する語法に乏しいことを作家が自覚した結果、「在V」の使用が促されたことを示唆する。したがって、「在V」句型は明代白話に已に存在した中国語本来の語法であるとはいえ、文学言語の低層でわずかに使用されたこの句型を清代において隠然と維持し続け、民国初期にそれを復活させ、新文学運動の中で頻用される句型にまで高めたのは、他でもなく外国語が明瞭に持つ進行の aspekto であったと見ることができる。日本統治期の台湾語資料に多くの「在V」が採用されている事実も、この見解を支持するものである。

総督府台湾語資料をも含めた歴史的な観点から見れば、さらなる興味深い新事実を指摘できる。すなわち、現代中国語における「在V」の普及に直接的な影響力を持ったか否かは別にして、二十世紀で「在V」を最初に頻用し、それを小説にまで応用したのは、新文学運動を推進した中国人作家ではなく、実は植民地において台湾口語の文体創造を試みた日本人通訳官であったという事実である。

#### 参考文献

- 伊原大策 1982 「進行を示す“在”について」『中国語学』229, 1-11頁。  
 ——— 1984 「台湾標準語（国語）中南方方言之特徴」『文化』47-3・4, 295-305頁。  
 ——— 1986 「所謂「兼語式」の変遷について」『中国語研究』25, 1-18頁。  
 ——— 1991 「明代白話作品に見られる“在V”」『中国文化』49, 14-23頁。  
 ——— 2013 「日治初期的臺語教本系譜」『編譯論叢』（台湾）6-2, 67-98頁。  
 ——— 2015 「日治時期初始臺語教材作者侯野保和與岩永六一之考察」『臺灣語文研究』（台湾）10-1, 31-55頁。
- 植田均 1982 「《水滸伝》にみえる文末の“在那里”について」『中国語学』229, 12-21頁。  
 王育徳 1969 「福建語における‘着’の語法について」『中国語学』192, 1-5頁。  
 王力 1944 「中国語法理論」『王力文集』（第1巻）山東教育出版社1984, 1-515頁。  
 王彬 2015 「《新青年》編集部对文学譯介的贊助路徑探析——以《基爾米里》中国之旅為中心的考察」『赤峰学院学報（漢文哲学社会科学版）』36-3, 106-108頁。  
 王錦慧 2015 「時間副詞「在」與「正在」的形成探究」『語言暨語言學』（台湾）16-2, 187-212頁。  
 大塚秀明 1991 「《晚採草》（1873）の進行形について—欧文中中国課本に見る“在V”進行形」1991年度中国近世語研究会発表レジュメ。  
 龔濟民・方仁念 1982 『郭沫若年譜』上, 天津人民出版社。  
 香坂順一 1952 「臨海方言の—特徴—」『人文研究』3-7, 80-100頁。

- 1968「《三言》のことば（一）」『人文研究』19-10, 1-11頁。
- 高増霞 2005「處所動詞、處所介詞和未完成体標記」、『中国社会科学院研究生院学報』2005-4, 68-73頁。
- 佐藤晴彦1990「《醒世恒言》における馮夢龍の創作（II）」『神戸外大論叢』41-4, 1-24頁。
- 1993「古今小説における馮夢龍の創作（改稿）」『神戸外大論叢』44-1, 1-20頁。
- 蕭斧 1957「“在那里”“正在V”和“在”」『語法論集』2, 144-156頁、中華書局『語文彙編』25, 中国語文社。
- 石毓智 2006「論漢語的進行体范疇」『漢語學習』2006-3, 14-24頁。
- 台湾總督府警務局 1934『台湾總督府警察沿革誌』第三編。
- 台湾語通信研究會 1914『語苑』7-3。
- 樽本照雄 1997『新編清末民初小説目録』清末小説研究会。
- 張亞軍 2002「時間副詞“正”“正在”“在”及其虛化過程考察」『上海師範大學學報（哲學社會科學版）』31-1, 46-55頁。
- 陳培豐2012『日本統治と植民地漢文』三元社。
- 潘為欣 2012「通譯經驗的轉化」『第六屆臺灣文學研究生學術論文研討會論文集』（台灣）。
- 村上嘉英1965「プロテスタント宣教師の閩南語研究—異民族伝道と言語の問題—」『日本文化』44, 52-72頁。
- 楊承淑 2014「譯者的角色與知識生產：以臺灣日治時期法院通譯小野西洲為例」『編譯論叢』（台灣）7-1, 37-80頁。
- 葉永勝 2010「陳独秀文學革命的踐行者：陳嘏及其文學翻譯」『安慶師範學院學報（社會科學版）』29-5, 66-69頁。
- 劉冬青・曹煒 2010「北京話“正”類時間副詞的歷時嬗變（1750-1950）」『江蘇大學學報（人文社會科學版）』9-6, 117-123頁。
- 呂叔湘 1940「景德傳燈錄中“在”“著”二助詞」『中國語語法論文集』科學出版社1955。
- 1955『中國語語法論文集』科學出版社。
- 1980『現代中國語八百詞』商務印書館。
- 黎錦熙・劉世儒 1957『中國語語法教材』第1冊，商務印書館（好文出版1990複印）。